

令和3年度
沿岸海域におけるマイクロプラスチックを含む
漂流ごみ実態把握調査業務

報 告 書
＜概 要 版＞

令和4年3月

沿岸海域におけるマイクロプラスチックを含む
漂流ごみの実態把握調査業務共同体

日本海環境サービス株式会社
株式会社テクノ中部
三洋テクノマリン株式会社

目 次

第Ⅰ章 調査地点	1
Ⅰ.1 調査実施地点.....	1
Ⅰ.2 測線設定の考え方.....	1
第Ⅱ章 漂流ごみ実態把握調査結果	3
第Ⅲ章 海域特性情報の収集	5
第Ⅳ章 漂流ごみの特性に関わる考察	7
第Ⅴ章 検討会	15
用語集	

概 要

平成 21 年 7 月に成立した「美しく豊かな自然を保護するための海岸における良好な景観及び環境の保全に係る海岸漂着物等の処理等の推進に関する法律」（平成 21 年法律第 82 号）が平成 30 年 6 月に改正され、「国及び地方公共団体は、地域住民の生活・経済活動に支障を及ぼす漂流ごみ等の円滑な処理の推進を図るよう努めなければならない」とされた。

沿岸海域におけるマイクロプラスチックを含む漂流ごみについては、その密度や種類に関する年毎の変動、季節別の特性や海域別の特性に関して不明点が多く、状況把握、原因究明、対策手法等の検討を行う必要がある。

そこで、本業務では、日本近海の代表的な海流[※]である対馬暖流[※]と黒潮[※]の影響が見られる北海道西岸、能登半島西岸、遠州灘沿岸の 3 海域において、マイクロプラスチックを含む漂流ごみの分布密度・量や種類等に関し、同一地点で四季を通じて継続的に調査を行い、また関連する海域特性情報とあわせて解析を実施し、今後の効果的・効率的な漂流ごみの分布調査・回収に資する知見の検討を行った。さらに、漂着ごみ、沖合海域における組成・分布調査とあわせ、総合的な実態把握のための知見を得ることを目的とした。 〔※：用語集参照〕

(1) 実態把握調査

・漂流マイクロプラスチック調査の実施

サンプリングネットを用いて、漂流マイクロプラスチックの採集、分析を行うことにより、漂流マイクロプラスチックの密度・長径・形状・材質・色等の分布状況を把握し、概況情報を整理した。

・漂流ごみ調査の実施

船舶からの目測等により漂流ごみの量（個数）、種類についてライントランセクト法により観測した。

(2) 海域特性情報の収集

マイクロプラスチックを含む漂流ごみの年毎の変動、季節別の特性や海域別の特性を分析するに当たり、その特性に関連があると考えられる海域の地理的特性、物理的特性、化学的特性等について、調査範囲における情報を収集した。

(3) 漂流ごみの特性に関する考察

マイクロプラスチックを含む漂流ごみの年毎の変動、季節別の特性や海域別の特性について考察を行った。

(4) 検討会

調査方針、調査結果の取りまとめ等に関する検討会（2 回：令和 3 年 9 月 1 日、令和 4 年 2 月 16 日）に提出するための資料を作成した。

< Summary >

In July 2009, the Act on “Promoting the Treatment of Marine Debris Affecting the Conservation of Good Coastal Landscapes and Environments to Protect Natural Beauty and Variety” (Law No. 82 of 2009) was revised in June 2018 and states that “national and local governments must actively promote the disposal of floating debris that interferes with the livelihood and economic activities of local residents”.

Regarding the yearly variation on density and type of floating debris containing microplastics in coastal waters, there are many uncertainties concerning the effect of the seasonal conditions and characteristic of the sea area, and hence is necessary to understand the present conditions, investigate possible causes and consider measures.

Following this, the present survey was conducted in the west coast of Hokkaido, where the influence of two typical ocean currents occurring in Japan, the Tsushima warm current and the Kuroshio current, can be observed. The density distribution, number, type, etc. of floating debris containing microplastics was estimated in three sea areas: west coast of Hokkaido, west coast of Noto Peninsula, and the coast of Enshu Nada, through continuous surveys comprising the four seasons at the same locations. Analyses were carried out considering the characteristics of each sea area and the results were examined towards obtaining information that will lead to effective collection and efficient surveys of floating debris in the future. In addition, using the information available on the distribution and composition of floating debris in offshore water, a comprehensive evaluation of the present situation was made.

(1) Understanding present situation

Floating debris microplastic survey: Floating microplastics were collected using sampling nets and analyzed to estimate the density distribution, major axis, shape, material, color, etc., organizing the general condition.

Floating debris survey: The amount and type of floating debris were estimated using visual observation from a vessel using the line-transect method.

(2) Characteristics of the sea area

To analyze yearly fluctuations, seasonal variations and characteristics of the sea area in floating debris, including microplastics, the geographical conditions of the sea area, physical and chemical properties, and other factors which could be considered to influence the results were evaluated.

(3) Characteristics of floating debris

Yearly fluctuations of floating debris including microplastics, seasonal variations and characteristics of the sea area were considered.

(4) Study group

Documents presenting the survey method, compilation of survey results, etc., were revised by a review commission twice: in September 1, 2021 and in February 16, 2022.

第 I 章 調査地点

I.1 調査実施地点

海流の影響がみられる沿岸域のうち、日本を代表する地点として、日本海側に 2 地点及び太平洋側に 1 地点、いずれも外洋に面する計 3 地点を調査箇所を選定した。日本近海の海流と調査箇所について図 I.1-1 に示す。



出典：閉鎖性海域漂流ごみ過年度調査（環境省）

図 I.1-1 日本近海の海流と季節風

I.2 測線設定の考え方

(1) 北海道西岸（北海道泊村沖）の測線設定

- 基本的な潮流は北流であり（海岸線に沿って南から北へ）、海岸線に平行に 2 列、海岸線から沖合に向かって 3 段、計 5 本の測線を設定した（図 I.2-1）。

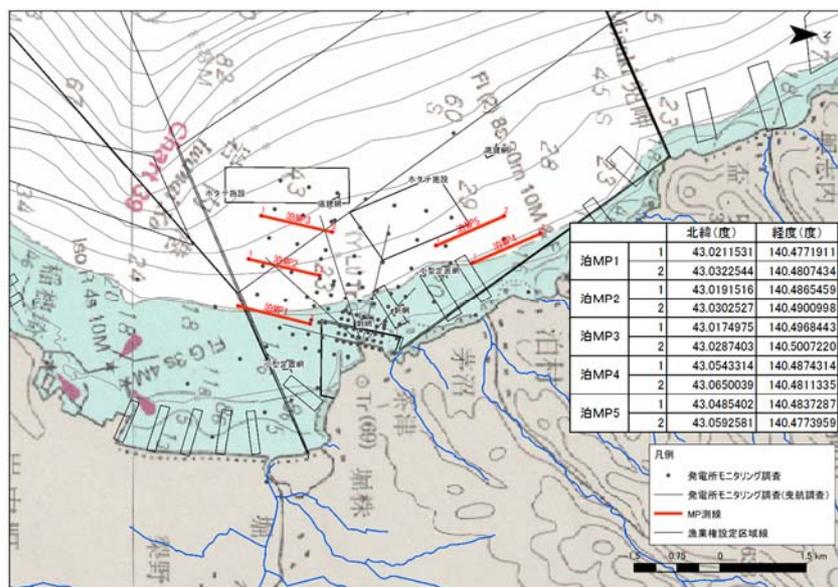


図 I.2-1 泊村沖測線詳細図（出典：海図 W28 増毛港至岩内港を編集）

(2) 石川県能登半島西岸（石川県羽咋郡志賀町沖）の測線設定

- 基本的な潮流は北流であり（海岸線に沿って南から北へ）、海岸線に平行に2列、海岸線から沖に向かって3段、計5本の測線を設定した（図 I. 2-2）。

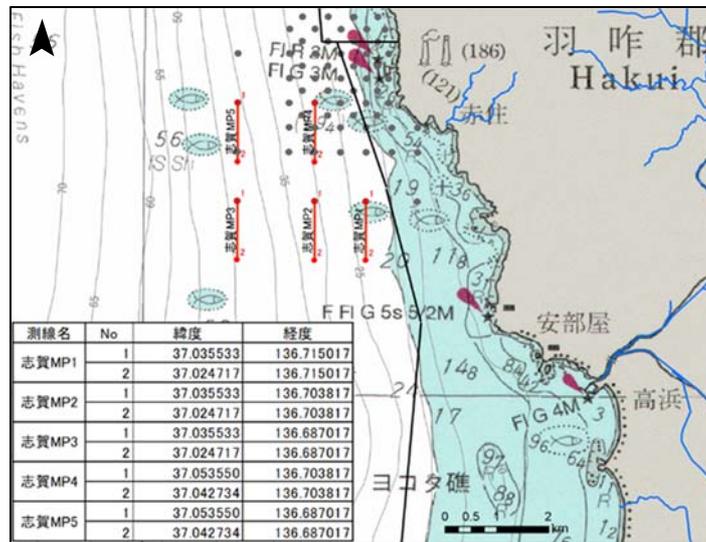
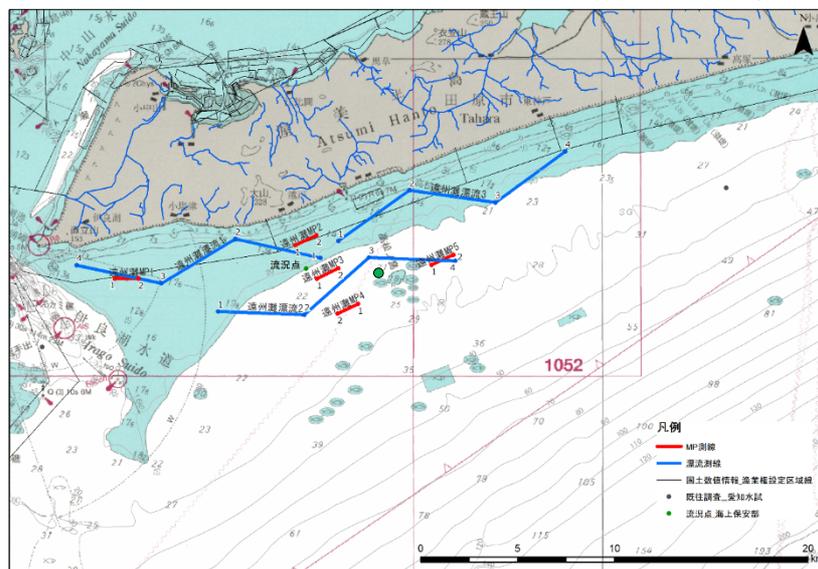


図 I. 2-2 志賀町沖測線詳細図（出典：海図 W1169 福井港至輪島港を編集）

(3) 愛知県遠州灘沿岸（愛知県田原市赤羽根町沖）の測線設定

- 流れの主軸は東西方向であり、これに直交して3測線、伊勢湾の海流の影響を考慮し、湾口付近に1測線（遠州灘 MP1）、半島東部に1測線（遠州灘 MP5）を設定した。（図 I. 2-3）。



【漂流マイクロプラスチック調査】

		北緯(度)	経度(度)
遠州灘MP1	1	34.56199167	137.05899170
	2	34.56199278	137.07221110
遠州灘MP2	1	34.57754830	137.16051462
	2	34.58227207	137.17243635
遠州灘MP3	1	34.56183560	137.17283181
	2	34.56677895	137.18467482
遠州灘MP4	1	34.55008706	137.19592259
	2	34.54555415	137.18425531
遠州灘MP5	1	34.56845516	137.23729600
	2	34.57309899	137.24947823

【漂流ごみ調査】

		北緯(度)	経度(度)
漂流1	1	34.571595	137.174684
	2	34.580504	137.126749
	3	34.559677	137.085239
漂流2	4	34.568125	137.037556
	1	34.546486	137.117085
	2	34.545110	137.165677
漂流3	3	34.571801	137.201935
	4	34.570271	137.250585
	1	34.579585	137.184873
	2	34.603287	137.224903
	3	34.597520	137.273270
	4	34.621437	137.312643

図 I. 2-3 赤羽根町沖測線詳細図（出典：海図 W70 御前崎至伊勢湾を編集）

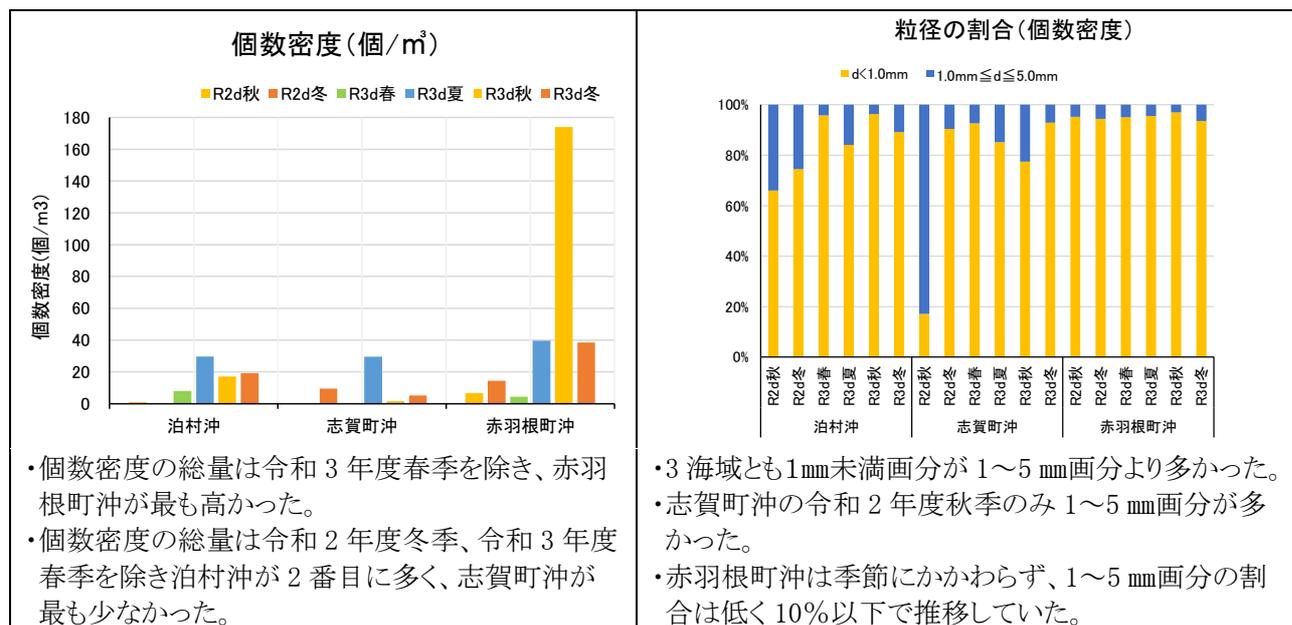
第Ⅱ章 漂流ごみ実態把握調査結果

下表に示す令和2年度の秋季、冬季、令和3年度の春季、夏季、秋季及び冬季に同一方法で実施した調査結果に基づき、海域ごと、季節ごとにマイクロプラスチック調査結果の比較を述べる。

なお、本資料では1mm以上5mm以下のサイズのマイクロプラスチックを「1～5mm画分」と呼び、1mm未満のサイズのマイクロプラスチックを「1mm未満画分」と呼ぶ。

表Ⅱ-1 各海域の調査実施日

地点	令和2年度		令和3年度			
	秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季
北海道 泊村沖	12月12日	1月24日	5月13日	7月20日	11月6日	1月19日
石川県 志賀町沖	10月19日	3月15日	5月31日	7月31日	10月19日	3月24日
愛知県 赤羽根町沖	11月17日	2月13日 2月14日 (漂流ごみ)	5月10日	7月12日 7月13日 (漂流ごみ)	11月14日	1月23日



図Ⅱ-1 マイクロプラスチックの個数密度(左図)、サイズ別割合(右図)

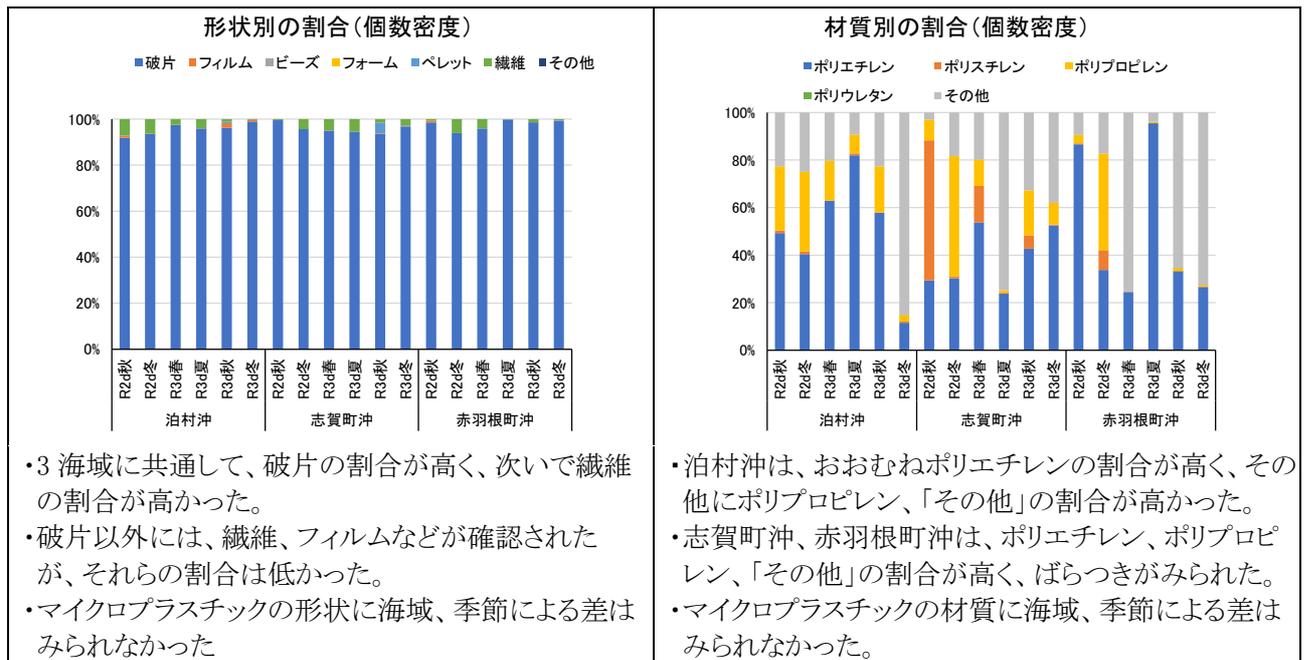


図 II-2 マイクロプラスチックの形状別割合 (左図)、材質別割合 (右図)

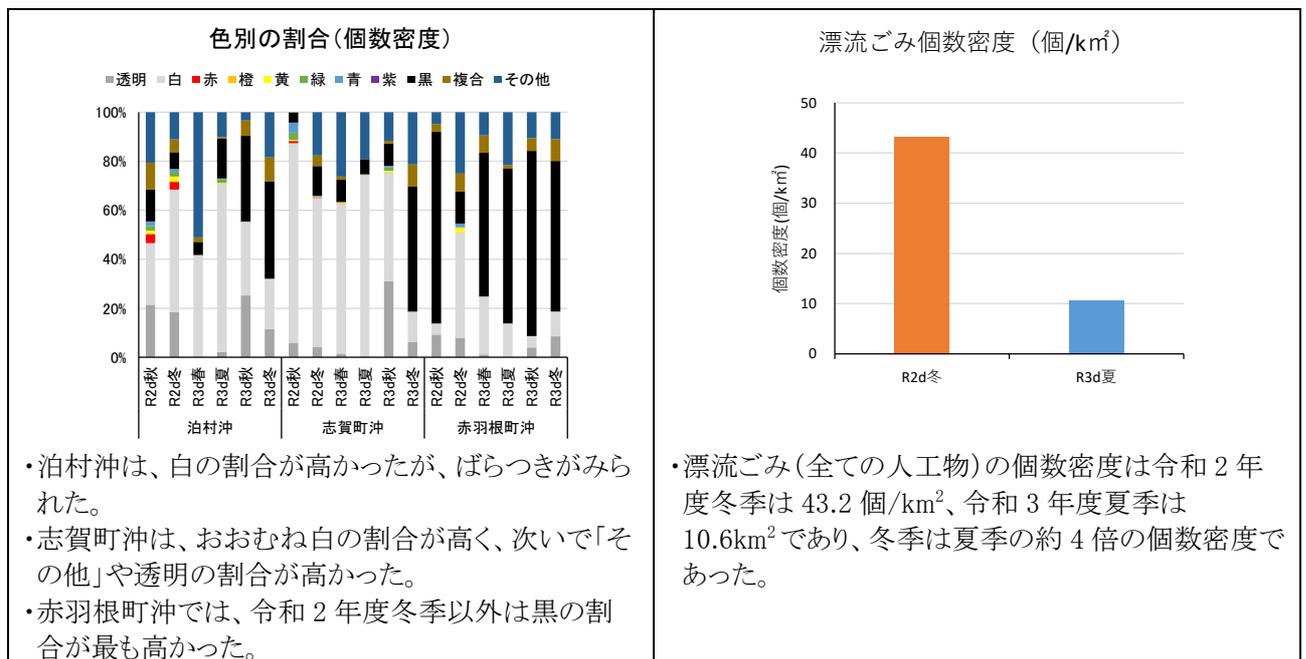


図 II-3 マイクロプラスチックの色別割合 (左図)、漂流ごみ個数密度 (右図)

第三章 海域特性情報の収集

(1) 春季調査

1) 泊村沖

- ①海流の影響 ・ 対馬暖流の影響はほとんどなかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 全ての測線で中底層については塩分 34 程度で、外洋水^{*}の影響を受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水^{*}の影響 ・ 調査日前に弱い降雨があり、表層の塩分は 32 程度に低下しており、降雨・陸水の影響を若干受けていたと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

2) 志賀町沖

- ①海流の影響 ・ 対馬暖流の影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 全ての測線で底層については塩分 34 程度で、外洋水の影響を受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前に断続的に降雨があり、僅かであるが降雨・陸水の影響を受けていたと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

3) 赤羽根町沖

- ①海流の影響 ・ 黒潮の影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 測線①の表層以外、全ての測線で表層から底層まで塩分は 34 以上であり、外洋水の影響を受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前に降雨があり、湾口部の測線①については湾内水等の陸水の影響が考えられたが、東側の測線へまでは影響しなかったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 当日は風がやや強かったものの、高波浪はみられず、風の影響は小さかったと考えられる。

(2) 夏季調査のまとめ

1) 泊村沖

- ①海流の影響 ・ 対馬暖流の影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 全ての測線で塩分が 34 程度で、対馬暖流による外洋水の影響を受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前に目立った降雨はみられず、表層で塩分低下がみられないことから、降雨・陸水の影響はなかったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

2) 志賀町沖

- ①海流の影響 ・ 対馬暖流は接近していたが表層への影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 沖側の測線の底層については塩分 34 程度で、外洋水の影響を一部受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前に弱い降雨があった。表層の塩分は 32 台と低下しており、降雨・陸水の影響があったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

3) 赤羽根町沖

- ①海流の影響 ・ 黒潮の影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 全ての測線において底層で塩分 34 程度であり、底層は外洋水の影響を受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前 10 日間で強い降雨があり、全ての測線の表層で塩分が若干低下していることから、湾内水や降雨による陸水の影響を受けていたと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

[※：用語集参照]

(3) 秋季調査

1) 泊村沖

- ①海流の影響 ・ 対馬暖流の影響が若干考えられた。
- ②外洋の影響 ・ 測線①、測線②の表層以外は塩分が 34 程度で、外洋水の影響を受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 測線①、測線②の表層以外塩分の低下がみられないことから、降雨・陸水の影響は小さかったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

2) 志賀町沖

- ①海流の影響 ・ 対馬暖流の影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 沖側の測線の底層については塩分 34 程度で、外洋水の影響を一部受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前に降雨があり、表層、中層の塩分は若干低下しており、降雨・陸水の影響が若干あったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

3) 赤羽根町沖

- ①海流の影響 ・ 黒潮の影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 沖側の測線において底層で塩分 34 程度であり、黒潮の影響を受けた外洋水の影響を一部受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前 10 日間に強い降雨があり、表、中層の塩分が若干低下していたことから、湾内水や降雨・陸水の影響が若干あったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

(4) 冬季調査のまとめ

1) 泊村沖

- ①海流の影響 ・ 対馬暖流の影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 中底層では塩分が 34 程度で、対馬暖流による外洋水の影響を受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 一部の測線の表層で塩分の低下がみられたことから、降雨・陸水の影響が若干あったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

2) 志賀町沖

- ①海流の影響 ・ 対馬暖流の影響は小さかったと考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 沖側の測線の底層については塩分 34 程度で、外洋水の影響を一部受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前に降雨がみられ、表層で若干塩分は低下していたが大きな低下はみられず、降雨・陸水の影響は小さかったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 強風、高波浪はみられず、風と波浪の影響は小さかったと考えられる。

3) 赤羽根町沖

- ①海流の影響 ・ 黒潮の一部が渥美半島に接近した状況がみられることから、本調査海域への黒潮の影響が考えられる。
- ②外洋の影響 ・ 全ての測線において塩分 34 程度であり、黒潮の影響を受けた外洋水の影響を受けていたと考えられる。
- ③降雨・陸水の影響 ・ 調査日前 10 日間で降雨はみられず、表層の塩分の低下もみられないことから、湾内水や降雨による陸水の影響はなかったと考えられる。
- ④風、波浪の影響 ・ 当日は風がやや強かったものの、高波浪はみられず、風の影響は小さかったと考えられる。

第Ⅳ章 漂流ごみの特性に関わる考察

令和3年度に実施したマイクロプラスチック調査結果に基づき、各海域における4季の気象・海象とマイクロプラスチックの量や分布などの関係を以下に取りまとめた。

① 塩分と個数密度

調査海域における外洋水（高塩分水）や河川水等の陸水（低塩分水）の影響を確認する目的で、マイクロプラスチックの個数密度と関連情報、現地観測結果（STD観測結果）を併せて図Ⅳ-1～3に示す。
(STD: salinity temperature depth-recorder: 水温塩分計)

② 有義波高*・風速と個数密度

本調査では表層に浮遊しているマイクロプラスチックを対象としているが、その量と質は鉛直混合や沿岸湧昇*によって変化すると考えられる。このため、調査時の鉛直混合や沿岸湧昇の有無を確認する目的で、調査時の風向風速と調査時前後の有義波高に係るデータを引用し、マイクロプラスチックの個数密度の結果と併せて図Ⅳ-4～6に示す。

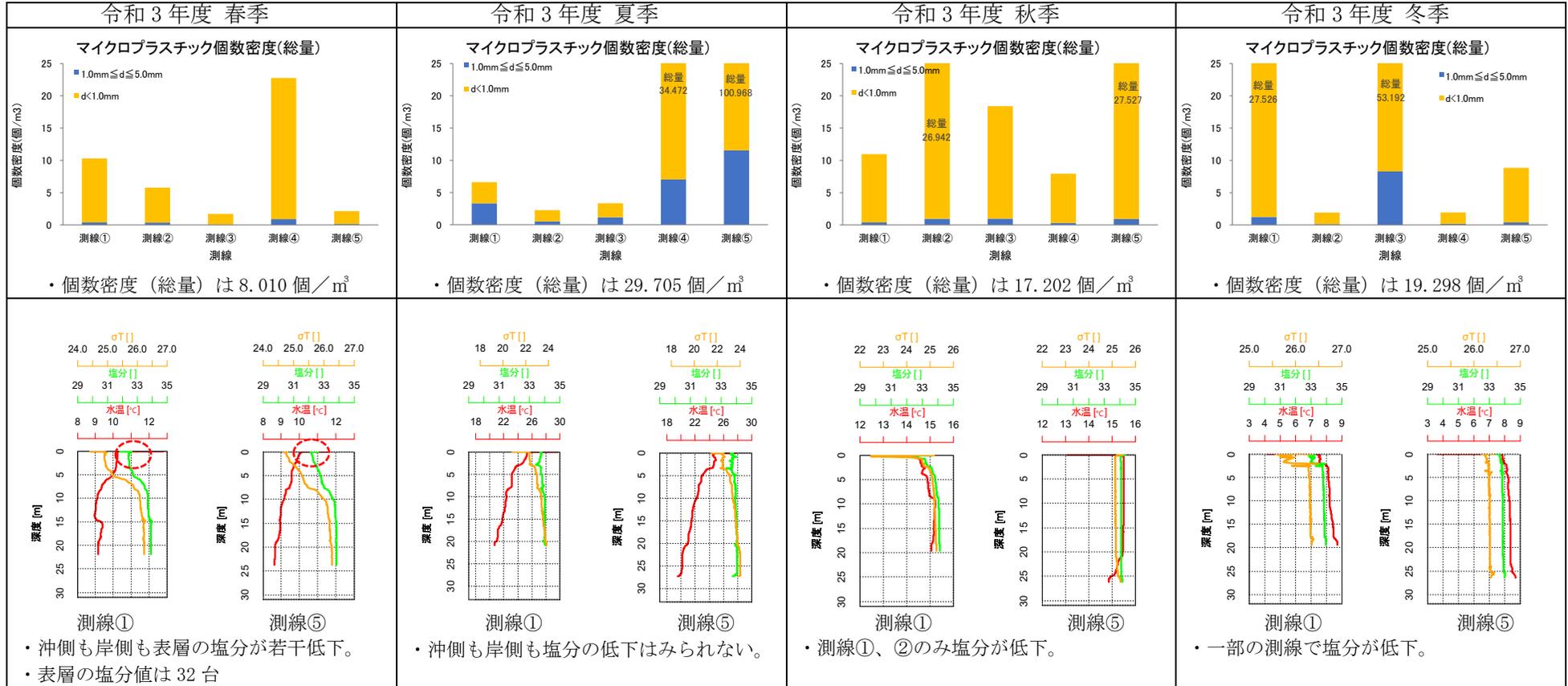
(有義波高データ 出典: 国土交通省, ナウファス*<https://www.mlit.go.jp/kowan/nowphas/>)

③ 風向と色別個数密度

泊村沖、志賀町沖では、マイクロプラスチックは白色のものが多く傾向がみられたが、赤羽根町沖では4季を通じて黒色のものが卓越していた。黒いマイクロプラスチックは、海域に広く分布していたことから、風による供給の可能性を確認するため、調査時の風向とマイクロプラスチックの色別の個数密度を図Ⅳ-7に示す。

[※: 用語集参照]

① 塩分と個数密度
【泊村沖】



調査時の塩分

【令和3年度】

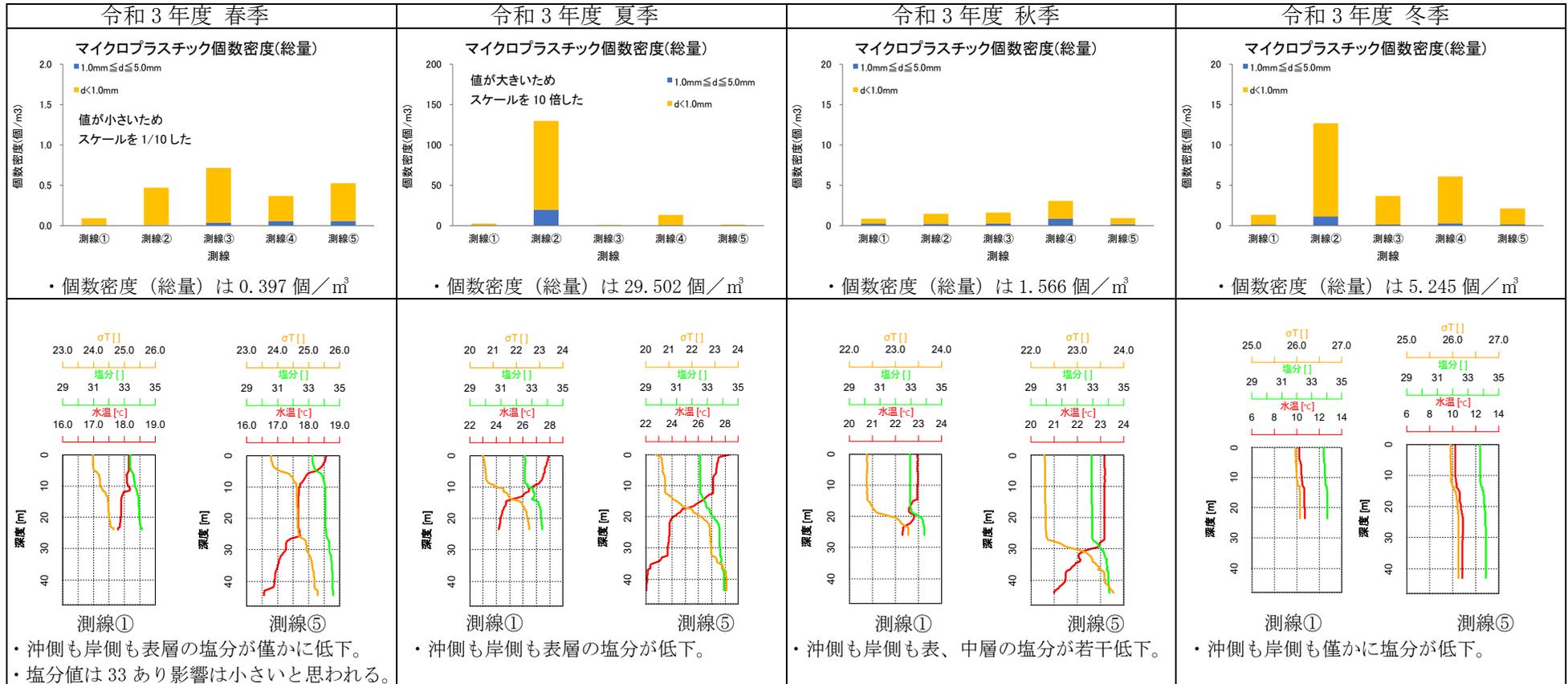
- ・泊村沖の個数密度(合計総量)は春季は8.0 個/m³、夏季で約29.7 個/m³、秋季は約17.2 個/m³、冬季は約19.3 個/m³であった。
- ・春季は全ての測線の表層で若干の塩分の低下がみられ、降雨・陸水の影響を若干受けていた。
- ・夏季は塩分の低下がみられず、陸水の影響はないと思われる。
- ・秋季は測線①、②のみで塩分が低下しており、陸水の影響は小さかったと思われる。
- ・冬季は大きな塩分の低下はみられ、降雨・陸水の影響が若干あったと思われる。



©OpenStreetMap contributors

図IV-1 塩分と個数密度(泊村沖)
(個数密度は海水1 m³あたりの密度)

【志賀町沖】



調査時の塩分

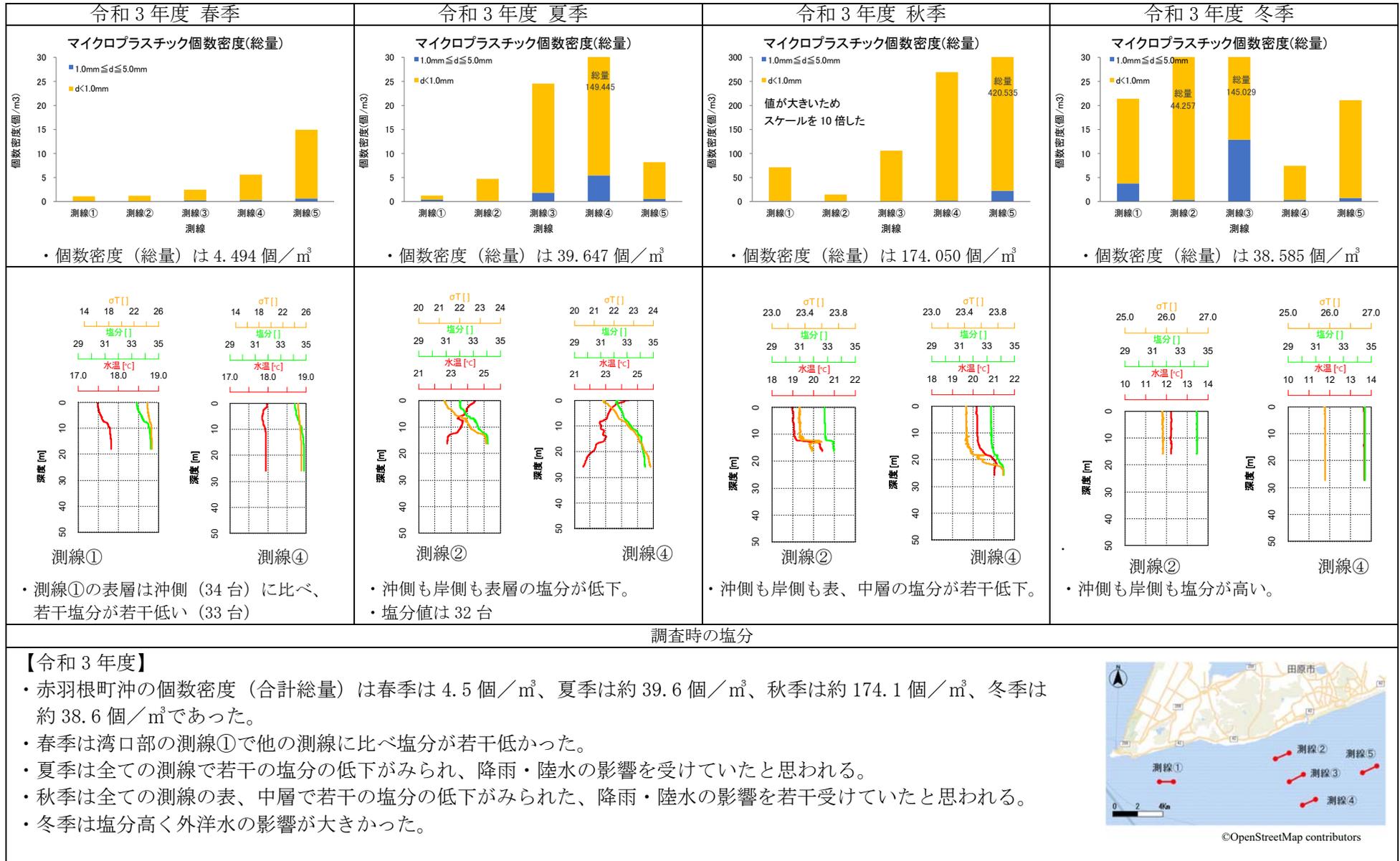
【令和3年度】

- 志賀町沖の個数密度(合計総量)は春季は0.4個/m³、夏季は約29.5個/m³、秋季は約1.6個/m³、冬季は約5.2個/m³であった。
- 春季は全ての測線の表層で若干の塩分の低下がみられ、僅かであるが降雨・陸水の影響を受けていたと思われる。
- 夏季は全ての測線の表層で塩分低下がみられ、降雨・陸水の影響を受けていたと思われる。
- 秋季は全ての測線の表、中層で若干の塩分の低下がみられ、降雨・陸水の影響を若干受けていたと思われる。
- 冬季は全ての測線の表層で僅かに塩分の低下がみられたが、降雨・陸水の影響は小さかったと考えられる。



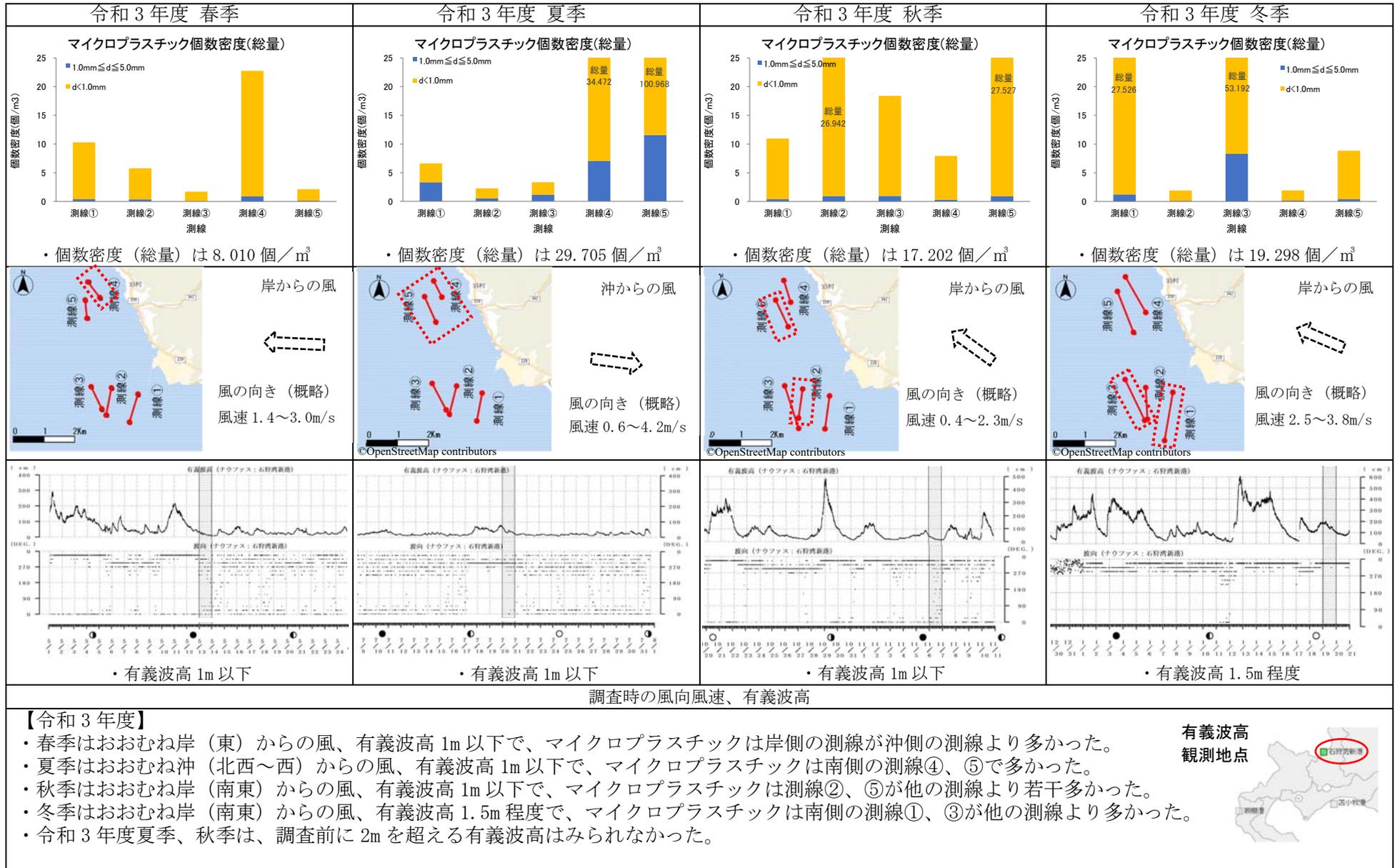
図IV-2 塩分と個数密度(志賀町沖)
(個数密度は海水1m³あたりの密度)

【赤羽根町沖】



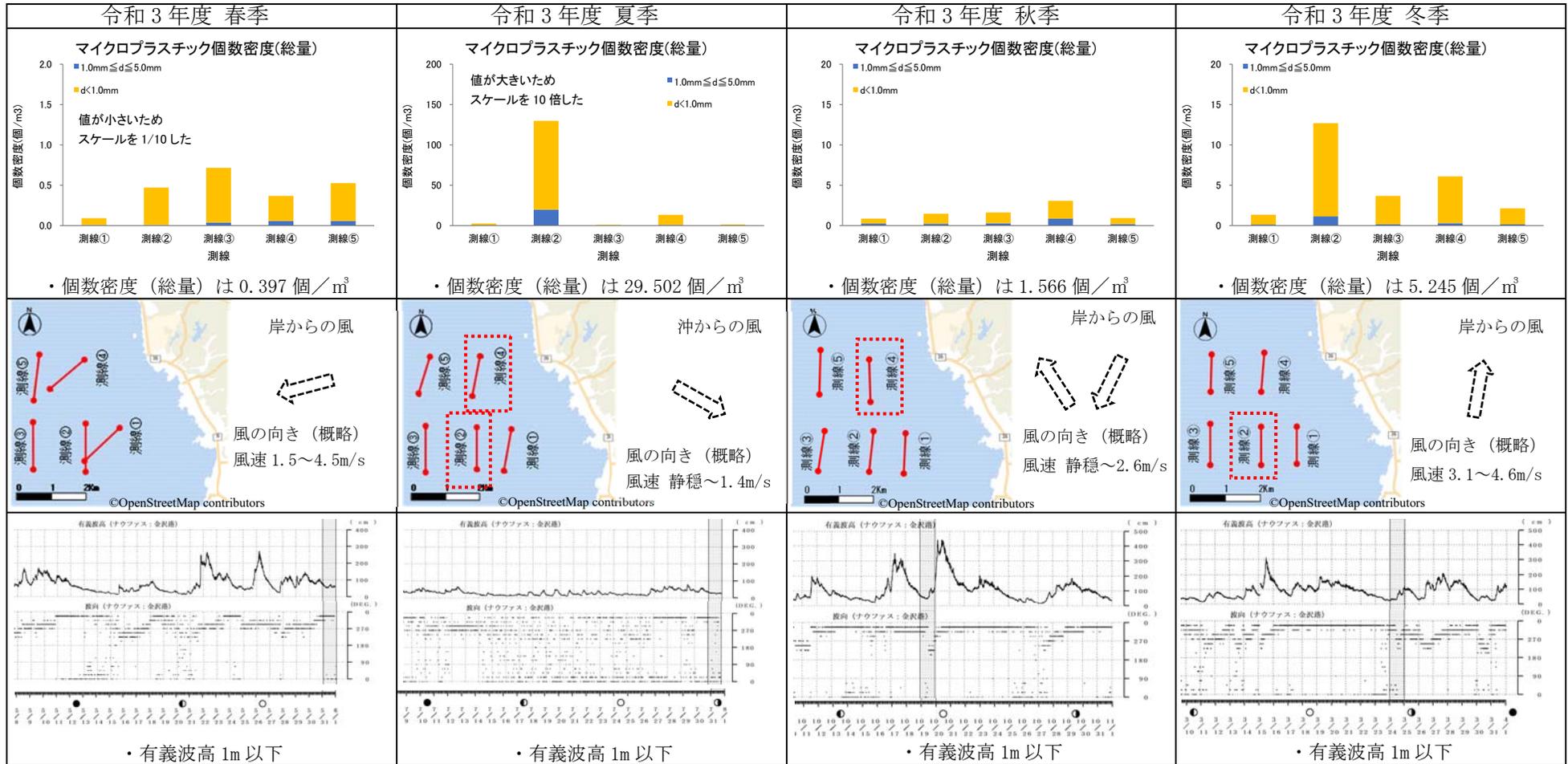
図IV-3 塩分と個数密度(赤羽根町沖)
(個数密度は海水1 m³あたりの密度)

② 有義波高・風速と個数密度
【泊村沖】



図IV-4 有義波高・風速と個数密度(泊村沖)
(個数密度は海水1mあたりの密度)

【志賀町沖】



調査時の風向風速、有義波高

【令和3年度】

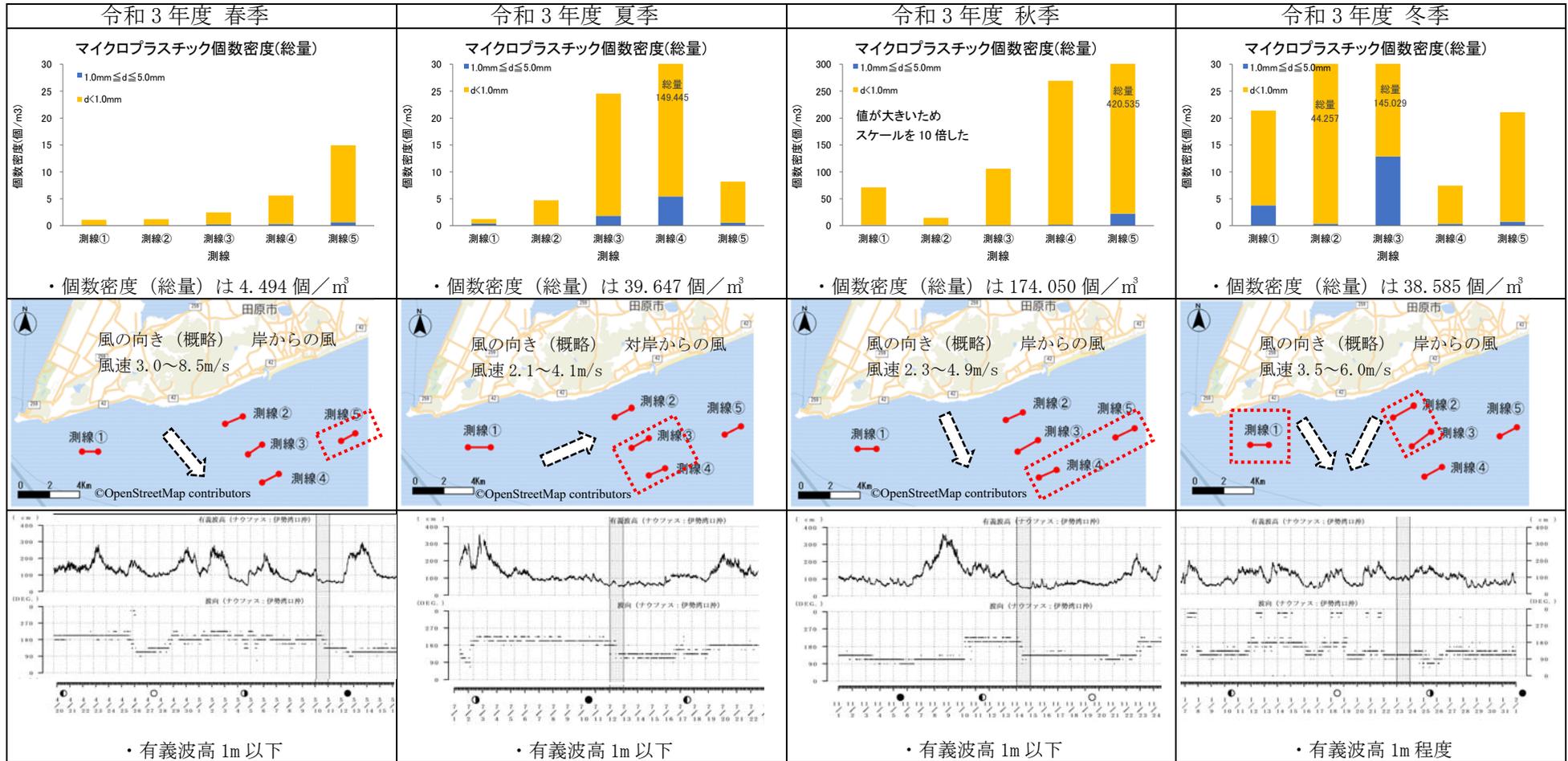
- ・春季はおおむね岸(東)からの風、有義波高 1m 以下で、マイクロプラスチックは岸側の測線①が他の測線より少なかった。
- ・夏季はおおむね沖(北西)からの風、有義波高 1m 以下で、マイクロプラスチックは測線②、④で他の測線より多かった。
- ・秋季の風は北東~南東とばらつきが大きく、有義波高 1m 以下で、マイクロプラスチックは測線④が他の測線より若干多かった。
- ・冬季はおおむね沖(南南西)からの風、有義波高 1m 以下で、マイクロプラスチックは測線②が他の測線より多く、測線①が少なかった。
- ・夏季は、調査前に 2m を超える有義波高はみられなかった。

有義波高
観測地点



図IV-5 有義波高・風速と個数密度(志賀町沖)
(個数密度は海水1mあたりの密度)

【赤羽根町沖】



調査時の風向風速、有義波高

【令和3年度】

- ・春季はおおむね岸(北~西)からの風、有義波高1m以下で、マイクロプラスチックは沖側の測線⑤が他の測線より多かった。
- ・夏季はおおむね対岸(西~西南西)からの風、有義波高1m以下で、マイクロプラスチックは測線③、④で多かった。
- ・秋季はおおむね岸(北北西)からの風、有義波高1m以下で、マイクロプラスチックは沖側の測線④、⑤が他の測線より多かった。
- ・冬季はおおむね岸(北西~北東)からの風、有義波高1m以下で、マイクロプラスチックは岸側の測線①~③が他の測線より多かった。
- ・令和2年度冬季、令和3年度夏季は調査前に2mを超える有義波高はみられなかった。



図IV-6 有義波高・風速と個数密度(赤羽根町沖)
(個数密度は海水1mあたりの密度)

③ 風向と色別個数密度

	令和3年度 春季	令和3年度 夏季	令和3年度 秋季	令和3年度 冬季						
個数密度	<p>個数密度(全体)</p>	<p>個数密度(全体)</p>	<p>個数密度(全体)</p>	<p>個数密度(全体)</p>						
風向風速	<p>風の向き(概略)</p> <p>風速 3.0~8.5m/s</p>	<p>風の向き(概略)</p> <p>風速 2.1~4.1m/s</p>	<p>風の向き(概略)</p> <p>風速 2.3~4.9m/s</p>	<p>風の向き(概略)</p> <p>風速 3.5~6.0m/s</p>						
材質の割合										
	<ul style="list-style-type: none"> ・「その他」が多い ・長径 1mm未満が多い <p>写真: 「その他」(黒)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ポリエチレンが多い。 ・長径 1mm未満が多い <p>写真: ポリエチレン(黒)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ポリエチレン、 ・「その他」が多い。 ・長径 1mm未満が多い <p>写真: 「その他」(黒)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ポリエチレン、 ・「その他」が多い。 ・長径 1mm未満が多い <p>写真: ポリエチレン(黒)</p>						
<p>【令和3年度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全ての調査季で、黒色のマイクロプラスチックが優占していた。 ・黒色のマイクロプラスチックは、海域に広く分布し、特定の測線にのみ多い傾向はみられなかった。 ・黒色のマイクロプラスチックは、形状は破片が多く、材質はポリエチレン、「その他」が多かった。 ・また、長径が 1mm未満の小型のものが多かった。 				<p>黒色のマイクロプラスチックの特徴</p> <table border="1"> <tr> <td>サイズ</td> <td>1mm未満</td> </tr> <tr> <td>形状</td> <td>破片</td> </tr> <tr> <td>材質</td> <td>ポリエチレン、「その他」</td> </tr> </table>	サイズ	1mm未満	形状	破片	材質	ポリエチレン、「その他」
サイズ	1mm未満									
形状	破片									
材質	ポリエチレン、「その他」									

図IV-7 海流・風向と色別個数密度(赤羽根町沖)
(個数密度は海水 1 mあたりの密度)

第V章 検討会

① 第1回議事概要

令和3年度 海洋ごみの実態把握と効果的・効率的な海洋ごみ回収 に関する検討会（第1回）

議事概要

日時：令和3年9月1日（水）15:00～17:00

場所：WEB会議システムにより開催

議 事

開会（15:00）

1. 環境省あいさつ
2. 資料の確認
3. 検討委員の紹介
4. 座長選任
5. 議事

（1）本検討会の趣旨について〔資料1-1、1-2〕

（2）漂着ごみ回収データの分析計画について〔資料2-1、参考資料1〕

（3）漂着ごみ組成調査データの分析計画について〔資料3-1、参考資料2〕

（4）沿岸域における漂流ごみ分布調査とりまとめについて〔資料4-1～4-3、参考資料3、4〕

（5）海洋ごみ回収に係るヒアリング、現地調査計画について〔資料5-1、参考資料5〕

6. 連絡事項

閉会（17:00）

② 第2回議事概要

令和3年度 海洋ごみの実態把握と効果的・効率的な海洋ごみ回収 に関する検討会（第2回）

議事概要

日時：令和4年2月16日（水）15:00～17:00

場所：WEB会議システムにより開催

議事

開会（15:00）

1. 資料の確認

2. 議事

（1）漂着ごみ回収データの分析結果と今後の課題について〔資料1-1、1-2、参考資料2〕

（2）漂着ごみ組成調査データの分析結果と今後の課題について〔資料2-1〕

（3）令和2～3年度の漂流ごみ実態把握調査結果について〔資料3-1～3-3、参考資料3〕

（4）漁業者と自治体の協力による海洋ごみ回収に係るマニュアル(案)及び現地調査について〔資料4-1～4-3、参考資料4～6〕

（5）沖合海域における漂流・海底ごみの分布調査結果について〔資料5-1〕

3. 連絡事項

4. 環境省あいさつ

閉会（17:00）

【用語集】

沿岸湧昇（えんがんゆうしょう）

地球自転にともなうコリオリの力が働くため、表層の水は全体として北(南)半球では風の方向に直角右(左)向きに運ばれる(エクマンの吹送流)。したがって、海岸を左(右)に見て海岸に平行な風が吹くと、沿岸域の表層水は沖に運ばれ、一方が海岸に遮られているため、その後には下層の冷たい栄養塩に富んだ海水が湧昇してくる。この現象を沿岸湧昇と呼ぶ。

出典:海洋情報研究センターHP 一部抜粋

海流（かいりゅう）

海洋においてほぼ一定方向の海水の流れをいう。

外洋水（がいようすい）

河川水・陸水あるいは浅海での潮汐混合の影響を受けていない海水をさすわけであるが、明確に定義されているわけではない。陸棚斜面から沖、あるいは黒潮の流れるわが国の南岸では黒潮域およびその沖合の水を指すことも多い。内湾域の沿岸近くの水を、外洋から流入した水と区別して用いることもある。

出典:海洋情報研究センターHP 一部抜粋

黒潮（くろしお）

黒潮は、東シナ海を北上して九州と奄美大島間のトカラ海峡から太平洋に入り、日本の南岸に沿って流れ、房総半島沖を東に流れる海流です。流速は速いところでは毎秒 2m以上に達し、その強い流れは幅 100km にも及び、輸送する水の量は毎秒 5,000 万トンにも達します。

出典:気象庁 HP 一部抜粋

対馬暖流（つしまだんりゅう）

東シナ海の大陸棚斜面を流れる黒潮水を主な起源とし、対馬海峡を通過して流入する高温・高塩分水(以下、暖水)が広がっています。その大部分は津軽海峡を通過して太平洋に、一部は宗谷海峡を通過してオホーツク海に流出します。この暖水の流れが対馬暖流です。

出典:気象庁 HP 一部抜粋

ナウファス

ナウファス(全国港湾海洋波浪情報網 : NOWPHAS : Nationwide Ocean Wave information network for Ports and Harbours)は、国土交通省港湾局・各地方整備局・北海道開発局・沖縄総合事務局・国土技術政策総合研究所および港湾空港技術研究所の相互協力のもとに構築・運営されている我が国沿岸の波浪情報網です。

出典:ナウファス HP

有義波高（ゆうぎはこう）

ある地点で連続する波を1つずつ観測したとき、波高の高い方から順に全体の1/3の個数の波(例えば100個の波が観測された場合、高い方から33個の波)を選び、これらの波高を平均したものを有義波高と呼ぶ。有義波は統計的に定義された波であるが、熟練した観測者が目視で観測する波高や周期に近いと言われている。

出典:気象庁 HP 一部抜粋

陸水（りくすい）

地球上に存在する水のうち、海水を除いたものの総称。